

令和元年度Ⅰ期 グループ企画2

番号	氏名	渡航先	国・地域	渡航先での受入期間
1	S.T	Mahidol Universtiy, Ramathibodi Hospital (マヒドン大学医学部)	タイ	R1/8/16-R1/8/23
2	Y.T			
3	N.Y			
4	K.T			
5	K.M			

国際医療研究会マヒドン大学交換留学の報告書

2019/8/16～2019/8/23 タイ バンコク

大阪大学医学部医学科 3 回生 S・T

今回 8 月 16 日～8 月 23 日までの 8 日間バンコクのマヒドン大学に滞在し、マヒドン大学の学生と共に病院の見学や観光を行った。各日行ったこと(スケジュール)と全体の感想を下に記す。

・スケジュール

8 月 16 日

夕方頃バンコクに到着し、マヒドン大学の寮で大学の学生や先生方と歓迎会を行ってもらい交流を深めた。私自身昨年の受け入れに参加していたこともあり、昨年日本に来た学生とも再会できて感慨深いものがあった。交流会の後は図書館や食堂の場所など諸施設を案内してもらった。

8 月 17、18 日

タイ有数のビーチがあることで有名なパタヤに出発し、タイの学生たちとパタヤで一泊した。パタヤに向かう途中ではタイガーズーに行つてトラやワニのショーを観たり、ワニ肉を頂いたりした。その他にも 1 日目にはゾウに乗る体験をしたり、夕食には伝統的なタイ料理を頂いた。2 日目のパタヤでは有名店で昼食にシーフードを頂き、その後バスでバンコクに戻った。バンコクに到着後はタイ有数のナイトマーケットでショッピングや夕食を頂いた。ナイトマーケットでは昆虫を食べるという体験ができ、貴重な体験となった。ちなみに昆虫は個人的には美味しいと思えた。



8 月 17 日ゾウ乗り体験

8 月 19 日

午前中は放射線治療のための病棟を、午後には MRI や CT スキャンを扱う病棟の見学を行った。特に放射線治療においては手術時に患者の身体を固定するための技術や患者の様子をモニタリングする徹底した管理がなされており、非常に目新しく、技術の高さを実感した。また患者の頭部を固定するためのマスクを一人一人に合わせて作っているようであり、そのマスクを作ってもらった体験ができた。私自身は放射線治療のための施設を見るのは初めてで、大阪大学にもあるのかどうか分からず、勉強不足を感じた。

午後の MRI と CT に関しては機械の性能や管理体制にさほど日本と差はないと感じたが、かなり台数が多く、多くのスペースをこれらに費やしていて、また案内してくれた教授も医療機器の磁場などを使った物理的な具体的な仕組みを強調していたこともあり、この技術を日本よりも重要視していると感じられた。

8 月 20 日

この日は小児科と外科の見学、細菌学実習の見学を行った。

小児科は感染症などといった疾患の原因ごとに診察室が分けられているのが印象的だった。

外科の見学では実際の手術の見学をさせてもらい具体的には副腎の摘出や乳癌患者の治療を見学した。外科手術に関してはモニターなどの設置がなく、この点においては日本の方が進んでいるように感じたが、全体的には大差はないように感じた。実際の見学では手術室の中でかなり近くで見学させていただき、また学生たちは 4 回生辺りから手術の見学や手伝いをさせてもらっていることもあり、早い段階で臨床に触れているのも印象的だった。

夕方には学生たちと細菌学実習に参加し、タイ語で授業をしていたので学生たちに説明してもらいながら実習を行った。実習の内容は大阪大学で行うものとはほぼ同じであり、グラム染色やコアグラゼ試験、カタラーゼ試験などを中心にした細菌の分類について復習ができた。

8 月 21 日

マヒドン大学の生徒たちが学ぶ環境と司法解剖の見学をした。具体的にはマヒドン大学では臨床実習の前に人体模型や模擬診断用の電子機器を使った授業を取り入れているらしく、特に後者については今までに見たことのないものだったので目新しく感じた。人体模型はその内部に心臓や肺などの主要な臓器と血管を備えており、本当の人体に見立てて実習ができる上に、隣の部屋でモニタリングが可能で人体模型への処置が適切であったかフィードバックできるようにもなっていた。また電子機器を用いた模擬診断も体験したが、機器に組み込まれ

ている症例が豊富なだけでなく、難易度で分類されており、教育におけるレベルの高さを感じられた。去年見学に行ったマレーシアのクアラルンプールでも思ったが、アジアの発展途上国での教育設備は日本に比べて新しく、かなり進んだものであるように感じる。

午後の司法解剖ではCT スキャンなどで死因を特定する日本と違って実際に解剖を行うのが主流であるという話を聞いたが、私自身は実際の解剖が日本でも主流だと思っていたので逆に驚かされてしまった。タイの司法解剖では死因を大きく 5 つに分けるらしく、その中に動物による死因が入っていたのが印象的だった。実際タイでは毒蛇に噛まれたことによる死なども珍しくないらしい。またタイは仏教徒が多いので解剖を行った後の葬儀のための処理がきちんとしおり、解剖の終わったご遺体をしばらく置いておく仏教様式の部屋も用意してあった。司法解剖の頻度は日によるらしく、全くない日もあれば1日で4, 5 回行う日もあるとのことであった。

8 月 22 日

この日は一日観光に費やした。バンコクの有名な寺院やショッピングモールを見学し、夜はカオサン通りを見学した。

午前タイ有数の寺院であるワットポーなどを見学した。ワットポーの大仏はタイで 3 番目に大きいものらしく東大寺の盧舎那仏と比べてもかなり大きかった。大仏は横向きに寝ている姿をしているのに高さは盧舎那仏と同じ約 14m もあるらしい。タイは植民地化されなかったこともあり、今までにない寺院の雰囲気を感じられた。

寺院の見学後はバンコク最大のショッピングモールに行き、ショッピングや見学をした後そこで夕食を頂いた。ショッピングモールにはかなり日本の店舗も入っており日本食がタイでは人気なのかなと感じた(実際人気らしい)。ショッピングモールでの夕食後はカオサン通りに向かい見学した。



ワットポー寺院

8月23日

この日は最終日であまり決まった予定はなかったが、朝食を食堂で頂き、午前中は大学の授業を見学した。授業はタイ語で行っていたが、スライドなどは英語であり、かなり英語を意識した教育がなされていると感じた。その後はタイの子どもたちの間では人気なキックボクシングの体験をして、その後は学生たちと夕食を食べ、夜の便に乗り24日の朝、日本に帰国した。最後の夕食には去年一昨年前の学生まで来てくれたこともあり非常に楽しく名残惜しいものであった。

・全体を通しての感想

留学全体を通して特に感じたのはタイではまだあまり医療が浸透していないということである。夜でも患者が病院の外で大勢待っていたりと医療があまり行き届いていないのを実感した。一方で実際の医療のレベル自体はかなり高くまた教育機関が充実していることから、これから発展していく可能性を感じた。また学生たちは普段から医学英語を学んでいることもあって英語に長けており、自分たち日本の学生がもっと医学英語だけでなくコミュニケーションとしての英語も学び、使っていく必要があると強く感じ、見習っていかなければならない部分を多く知ることができた。今回の体験をこれからも勉強のモチベーションなどに生かしていきたい。

最後になるが、今回の交換留学に関わった人全員に感謝を述べたい。タイの病院を案内して下さったマヒドン大学の先生方、奨学金を出して下さい下さった岸本先生、そして特に、受け入れて下さったタイの学生5人の方々には8日間通して本当に色々迷惑をおかけしたが、おかげでとても楽しい旅と素敵な友情を育めたと思う。本当にありがとうございました。



2019年度 岸本国際奨学金による 海外活動実施報告書

医学科4年 Y・T
2019/08/16~23

渡航先および受け入れ機関名：

タイ バンコク マヒドン大学(Mahidol University Faculty of Medicine
Ramathibodi Hospital)

概要

本企画はマヒドン大学と本校の間で、例年行われている交換留学プロジェクトの一環であり、タイ学生の受け入れを含めた、阪大医学部側の企画運営は大阪大学国際医療研究会によって運営されている企画である。本プログラムにおいては、病院見学を主な目的として行っているが、それだけに留まらず現地学生や現地の病院関係者、あるいはタイに住む一般人との触れ合いを通じて、互いの医療や文化への理解を深めることができ、ひいては医学生としての国際感覚を養うものとなっている。プログラムは今年で26回を数え、タイと日本の学生の協力によって、プログラムの円滑な運営や友好的関係が維持されている。

今回は国際医療研究会より5名の学生（2年生1名、3年生3名、4年生1名）がタイへ渡航し、一週間あまりにわたって病院見学および、現地学生との文化交流を行った。

スケジュール

8月16日 関西国際空港発

スワンナプーム空港着

大学の寮の一室で歓迎パーティー

8月17日 バンを貸し切ってパタヤへ

タイガーズー（虎の動物園）へ



日本の学生、タイの学生の集合写真

ゾウに乗る体験

ナイトマーケット見学

8月18日 パタヤの洋上でパラセーリング体験

バンコクに戻りタイ古式マッサージ

バンコクのナイトマーケットへ

8月19日 病院見学（放射線科）

8月20日 病院見学（小児科・手術室見学）

8月21日 病院見学（救急・シュミレータ）

8月22日 病院見学（法医学）カオサン通りへ

8月23日 ドンムアン空港より帰国

活動内容・報告

放射線科

最初に見学させていただいた診療科だが、まず病院の設備や環境の質の高さに驚かされた。放射線治療では、侵襲性を可能な限り抑えて、治療するためにしっかりと固定する必要があり、そのためにどういう器具を使うか、どういう工夫がなされているかなど、丁寧に説明して下さった。その後、講義のような形でマヒドン大学のCTやMRIの設備の充実具合などを説明していただいた。タイの先進的な医療はそのような検査器具によって支えられているものであり、大変興味深かった。また設備の費用は全て税金、というわけではないらしく、寄付など公的資金を使わない形で拡充していったということを強調されていた。

救急科

救急システムを丁寧に説明していただきながら、様々なところを案内して頂いた。マヒドンの救急は、全レベルの救急患者さんを受け入れるシステムで、たくさんの患者さんが来ていた。

小児科

小児科では実際の患者さんのいるスペースを、看護師さんに案内してもらった。軽い症状から重い症状まで、様々な症状の患者さんが来院されていた。他の科と違って、小児科だけの薬局が作られていたり、患者の子供だけではなく親も何人も来院されるなどしてとても混雑していたり、ほかの科にはない特色があった。

擬似人形モデル・治療シミュレータ

今回の病院見学で一番先進的だなと自分が感じた部分だった。人形モデルやシミュレーターを使って、様々な疾患の患者さんの練習が出来る。学生などの学習にも利用できるし、何年も経験を積んだ医者でも通常では見ないようなレアな疾患の練習ができる。非常に有用なシミュレータだなと感じた。また適切な治療の度合いや早さによってスコアも出るようになっており、学生の間ではこのスコアを競って、大会なども開かれているそうだ。



手術見学

日本の手術室とほぼ変わらないような感じだった。細かくみれば日本の方が先進的なのはあるが、非常に衛生的な部屋で良かった。見学させてもらったのは副腎の摘出手術と乳がんの全摘手術で、非常に興味深かった。

法医学

いわゆる司法解剖を行っている現場を見学させて頂いた。慣れているのか、非常に捌くスピードが早く、圧巻な光景だった。タイでも高齢化が進んでいるのか、近年は身寄りのない孤独死が多くなっているそうで、そのような人の死亡の原因を調べるといった作業だった。心筋梗塞で亡くなった人には、耳に黄色のものが現れることが多くらしく、その亡くなった人もそのサインが出ていたことから、おそらくそうだろうという推測の元進めていったら、肺がんによって心臓にも浸潤していたことがわかった。非常に面白い見学であった。



謝辞

今回のプログラムでは様々な方にお世話になった。

日本側のプログラムの開催では、病院見学を行うにあたって、さまざまな医療関係者の先生や看護師の方達にお世話になりました。またタイの留学生の宿泊先を提供して頂いたホストファミリーの皆さま、そして受け入れをしているんな場所の観光の引率を手伝って頂いた学生の方々。

タイでのプログラムでも、同じように医療関係者の皆さま、そしてたくさん時間をかけて色んなところに連れていってくれたり、タイ語を通訳してくれたり、そして色んな事を話し合って交流を深めてくれたタイの学生の方々。

そして今回の海外渡航に関して深い理解をしめし、本企画を採択してくださった岸本奨学金の関係者並びに岸本忠三先生。

このプログラムは多くの方達の協力によって成り立っており、そのおかげでこのような貴重な体験をすることができました。

今後の自分の人生において、この経験を生かして、世界の医療と平和に貢献できるよう精進してまいります。感謝申し上げます。ありがとうございました。

令和元年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

タイ王国 バンコク
マヒドン大学 ラマティボディー病院 医学部

Bangkok, Thailand
Faculty of Medicine, Ramathibodi Hospital, Mahidol University

大阪大学医学部医学科 3 年生
国際医療研究会

N・Y

海外活動期間
2018 8/16～8/23

1. スケジュール

以下のようなスケジュールで過ごした。それぞれ活動の詳細は3に書いてある。

- 8/16 スワンナプーム空港到着
- 8/17 パタヤ
- 8/18 パタヤ
- 8/19 サイバーナイフを見学、画像診断科の見学、サイアムセンターで観光
- 8/20 小児科、シムベイベーの見学
- 8/21 法医学教室の見学
- 8/22 ワットプラケオ、ワットポーの見学
- 8/23 ムエタイ体験
- 8/24 帰国

2. 目的

ラマティボディ病院の見学を通じて、タイの医療状況を学び、日本とタイの医療の違いを学ぶ。

また、社会見学や様々な人々との交流を通じてタイの文化や日本とタイの文化の違いを学ぶ。

3. 活動内容

(1) 病院見学

1

2 画像診断科

ここでは、CTやMRIを用いた画像診断を行っていた。

MRIでは磁力と電波を利用して人体の断面を撮影することができ、その原理について詳しく教えていただいた。

またMRIを用いて健常者の脳のデータを収集してデータベースを作っている。

3 小児科・新生児科

小児科はAセクションとBセクションの二つに分かれていた。Aセクションは風邪などの普通の疾患を診るところでBセクションは小児のガンを専門的に見ているところだった。とてもたくさんの患者がいた。Bセクションはガンの外来を専門的に診ているところだが、週のうち二日間を専門的に外来を見る日に充てていた。ガン外来の時は子供の家族が一堂に集会してとてもたくさんの人で病棟が溢れるそうだ。

4 サイバーナイフの見学

サイバーナイフという放射線治療の医療機器を見せてもらった。サイバーナイフは手術の難しい腫瘍を治療することができる。その上侵襲性が低いこともメリットの一つである。またサイバーナイフを頭部に使うときには、頭部を固定する必要がある、そのために患者一人一人にあわせて形状記憶プラスチックで固定用のマスクを作る。大阪大学の学生の一人が実際にマスクを作ってもらっていた。

5 病理法医学科

病理法医学科では、病理解剖や司法解剖を行っており、1 日前に亡くなったと思われる遺体の解剖が行われていた。まずは遺体の身元確認から始まり、死亡日時の推定、死因の救命と病理解剖が続いた。隣室にはご遺体の安置所のようなところがあり、化粧・正装したご遺体があった。部屋の中には仏陀の像がある仏壇だけでなく、キリスト教徒のための祭壇もあった。また臓器などのホルマリン漬けも行っていた。

6 シムバイビーと画面学習用の機械の案内

シムバイビーという挿管の練習や人工呼吸、AED の練習ができる赤ちゃんにもした機械があった。またケーススタディをすることができる機械があった。医学教育にお金を入れているのだなと思った。

7 細菌学実習

医学科 3 回生の学生が細菌学実習を行っていた。実習内容はグラム染色により細菌を分類する実験であり、これは大阪大学の 3 回生が行う細菌学実習と同じであるが、実験手法などはエタノールをつける方法などが多少違った。またタイの教材はすべて英語のようだが、先生はタイ語で授業をしているようだった。

(2) 社会見学

1 ワット・ポー、ワット・プラケーオを見学した。

ワット・プラケーオはとても大きく荘厳な寺院であった。ヒンドゥー教と仏教を混ぜたタイの神話の巨人や天使を行ったモチーフが各所に見られた。全体的に日本の寺院とは異なりきらびやかな装飾が施されていた。ワットポーはタイ古式マッサージの起源であり、とても大きな大仏があった。タイの子達は全体的にとっても信心深く、基本的にみんな仏教を信じているように見えた。きちんとお祈りをして、仏を大切にしているように伺えた。日本人は本格的に仏教を信仰している人はそこまで多くないので、不思議な感じがた。



大宮殿

2 パタヤ

パタヤに行き、海水浴などを行った。パラセーリングを行った。たくさんの海水浴客がいた。海水は綺麗で、気候もちょうどよかった。

3 エレファントパーク

象に乗って写真を撮ったり、象の鼻に乗って写真を撮ったりした。象はとても大きく力強かった。同じ哺乳類がここまで大きく育つのは不思議である。生存戦略としてのニッチを狙った生き方である。人間も脳を発達させるという隙間が大当たりしてここまで繁栄してきた。大きい方が有利に見えるが、陸上で最も大きい哺乳類がここまで数を減らしているのを見ると、人間の地球に対する影響力がどれほどのものなのか考えさせられた。

4 タイガーパーク

ここではトラと触れ合うことができた。

日本ではトラを膝に乗せてミルクを飲ませながら、写真を撮るなんて絶対にできないだろうと思われた。海外に来るとよく感じるが、他の国の人は大抵日本人より色々と大雑把である。日本だとトラなんて危ない。厳重な檻で囲って絶対に近づくべきではない、となるところを、トラを膝に乗せて写真を撮らせたら儲かるんじゃないか、と考えられるタイ人はとても面白いなと思った。

4. 成果

タイの学生と交流して、1 番驚いたことがタイの学生はとても英語が上手だったことである。交換留学に参加した学生だけでなく、いろんな学生と交流したが、タイの学生は英語が堪能な学生がとても多かった。

なぜそんなに英語が上手なのかと聞いたら、何やら英語のテストがあるらしくてそれを受けるためにみんな勉強するそうである。彼らと比べると日本人は海外留学に申し込んできた人たちなのに貧弱な英語だったと言わざるを得ない。

日本語で教育を受けられて、日本の経済圏だけで売ったり買ったりできるのはとても素晴らしいことだと思う。しかしこれからの時代、国と国との境はどんどんなくなり、世界に働きかけて仕事をするチャンスは増えるだろう。そんな時に、日本人は英語を使えないとなると他国に遅れをとるのは目に見えた結果である。

日本の人口がこれから減少していく中で、もう少し他国に目を向ける学生が増えても良いのではないかと思った。それに加えて、様々な国と交流して日本の技術を海外に輸出したり、その逆に海外の技術を日本に取り入れたりすれば、世界の医療はどんどん進化していくことだろう。移動もしやすくなり連絡を取るのがたやすくなった現在、世界の医療を進歩させるスピードをもっと速くすることができる。医療の進歩に乗り遅れないためにも、また、医療の進歩の最先端に立つためにも、日本人の医療者が英語に堪能になり世界に目を向けることは事は必要不可欠だろう。

5. 抱負

タイの学生と交流することで世界に通用する医療者を育てることはとても大事なことでと痛感した。彼らは外の世界に目を向けている。私も英語の勉強をして、世界の人と交流したいと思う。世界は広く、70億の人間と交流するのも夢ではなくなりつつある。広い世界に目を向けて、これからの医療を考えたいと思った。

2019 年度海外活動実施報告書

タイのマヒドン大学との交換留学について

医学部医学科 2 年生 ***** K・T



・はじめに

この度のタイのマヒドン大学との交換留学を行うにあたり、協力してくださったホストファミリーの皆様、大阪大学医学部附属病院の先生方、マヒドン大学の学生たちやこの留学に基づくサポートをしてくださった方々、マヒドン大学附属病院の先生方、そして毎年このプログラムを岸本国際奨学金に

採択してくださっている岸本忠三先生および関係者の皆さま方、心より感謝申し上げます。

・概要

タイのマヒドン大学医学部の学生たちと交換留学を行うことにより、互いの国の医療の共通点ならびに相違点を深く理解し、医学に関する国際的な視野を養うことが目的である。本プログラムでは互いの大学の附属病院にて病院実習を行うだけに留まらず、タイの学生や関係者の方々と深く関わることで、より互いの国の医療や文化をより深く理解できるようになっている。今回は8月16日から8月23日までの8日間に渡り2年生1名、3年生3名、4年生1名の計5名がタイへ渡航しこのプログラムを行った。



・ 活動内容

8 月 16 日

バンコク、スワンナブーム空港に到着後、大学へ移動し、タイの学生および先生方による歓迎会が行われた。初めての留学だったがタイの学生、先生方が暖かく迎え入れてくれたおかげで緊張がほどけ楽しむことができた。

8 月 17・18 日

リゾート地パタヤに移動。ゾウに乗る体験をさせてもらったり、虎と触れあう体験をしていただいた。日本ではできないような貴重な経験で、タイの自然や文化と触れあうことができた。また海ではパラセーリングを体験した。この日はパタヤにてタイの学生さんと共に 1 泊することで、より交流を深めることができた。



8 月 19 日

放射線にて病院実習を行った。最新の MRI や CT スキャンが日本と同様に使われており驚いた。また患者一人一人に対して使われる固定器具の技術や手術中の患者を徹底的にモニタリングする技術にも驚かされた。私が思っていたよりもはるかに高度な技術が使われており良い勉強になった。また診察室のプライベートは徹底して守られており大変興味深かった。

8月20日

小児科の見学をした。軽い症状の患者さんから重い症状の患者さんが数多く訪れていた。子供の患者さんが多いことからキャラクターであふれた、リラックスできるような空間作りがなされていた。また外科手術の見学もした。乳癌の全摘手術だったが、非常に衛生的な空間で日本とあまり変わらない様子だった。私自身、初めてこうした外科手術を見学したため大変よい経験となった。

8月21日

疑似人形モデル、模擬診療シュミレーターを用いた実習を行った。この模擬の患者さんに対し正しい治療ができるか、素早く対処できるかがスコアとして表示されこれを通じて学生同士が競いあっていた。学生たちが何度も練習でき、また学習に利用できる大変先進的な技術でありとても興味深かった。また司法解剖の見学も行った。身元不明の男性の死体の解剖だったが、この男性の死亡推定時刻や死因がどのようにしたら判明するのかを教えてもらい、大変貴重な経験をさせていただいた。

8月22日

タイで最も有名な寺院ワットポーに行き参拝してきた。数多くの人が参拝に来ておりこの国における宗教の重要性を感じた。寺院の建築物はどれも荘厳な装飾がなされており感動した。タイの古くから風習、伝統にふれることができよい体験だった。夜はカオサン通りに行きタイの学生たちと共に最後の夜を楽しんだ。店に集まった多くの人々と言語の壁を超えて楽しめた夜だった。



8月23日

タイの学生たちと最後のお別れをし、スワンナブーム空港を出発し、日本へ帰国した。

・最後に

この交換留学を通じて一番印象に残ったのは、タイが想像以上に発展していたことである。医療においてもショッピングモールなどの施設においても日本と変わらないような姿が所々見られた。その一方でやはりいまだ貧富の差を感じる場面も見受けられた。こうした体験が国際的な視野をもつことに繋がると思う。またタイの学生たちの心の優しさや、医療に対する意識の高さに触れ、私自身見習わなければならないと思い、自分を見つめ直す良い機会となった。最後に、本プログラムに携わって頂いた関係者の皆様方、このような貴重な体験ができましたことも誠に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



2019 年度

岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 2 年 学籍番号: ***** 氏名: K・M

渡航先国: タイ

受け入れ機関名: マヒドン大学

渡航先機関での受入期間: 令和元年 8 月 16 日～令和元年 8 月 23 日



・目的

タイの医学生や医師と接して現場を見学することで、海外の医療に触れ、国際感覚を養うとともに、タイの医療や文化を知り、友好を深める。

・スケジュール、活動内容

・8/16

スワンナプーム空港到着後、マヒドン大学のドミトリーにてウェルカムパーティー。マヒドン大学側の今年度と昨年度のプログラム参加者の生徒達が暖かく迎えてくれた。

・8/17.18

学校が休みだったので、大型のバンを借りてリゾート地のパタヤにて観光した。ゾウに乗ったりトラに触ったり、クロコダイルを食べたりした。海ではパラセーリングを体験した。東アジアならではの体験が出来た。

・8/19

放射線科を見学した。MRI や CT などの施設、病棟の見学をした。想像していたよりも高度な、日本と変わらないと思われる最新の機械が導入していて驚いた。導入さえ出来ればすぐ使える機材の発展こそ、人の技術面で未熟な部分もある発展途上国の医療にダイレクトな影響を及ぼすのだと知った。ただ、それに投入される資金は一部個人のものと知り驚いた。また診察室は完全に密室でプライバシーに関して徹底しているという日本との違いも見られた。



・ 8/20

小児科と外科手術の見学をした。小児科では、風邪など軽度の症状の患者から癌などの重度の患者まで、たくさんの患者が同じ空間で順番待ちをしているのが印象的だった。待合室や診療室では、たくさんのキャラクターを飾るなど、子供をリラックスさせるような空間作りがなされていた。外科手術の見学では、乳癌の手術の見学をした。手術室に入るに当たっての装備は日本のそれと変わらなかった。その手術では、研修医の先生が、ベテランの先生に教わりながら手術をしていた。私は内視鏡手術しか見たがことなく、大きく皮膚を切る手術を見るのが初めてだったので、とても楽しかった。

・ 8/21

マヒドン大学の学生の実習と司法解剖に参加した。実習では、人体模型や診療シミュレーションを体験した。シムベイベーと呼ばれる赤ちゃん型の機械を用いた。ベイベーの心拍数、血圧、または泣いたり笑ったりというような反応を操作できるようになっており、その対処をテストされたりするようだった。シミュレーションは、患者との会話、どういった診察をするか、それを踏まえての治療等を行うもので、かかった時間、間違えた選択をした割合で点数化されるものであった。司法解剖では、路上で亡くなった身元不明の男性の解剖をした。まずそのシチュエーションが日本ではなかなかないものであり、興味深かった。死後どれくらいの時間が経っているかの調べ方を教えてもらった。その後遺体の直接的な死因は肺癌であった。肺は汚染が著しく色が真っ黒だった。悪環境下での長時間の労働が原因だろうと推測されていた。また、飢餓状態であったために、胆液が溜まって胆嚢が拳サイズまで大きくなっていったのが衝撃だった。



・ 8/22

タイのバンコクの最も有名な寺院である、ワットポーに行った。案内してくれたマヒドン大学の生徒が参拝の方法を教えてくれた。彼らが手慣れた動作で真剣に祈っているのを見て、タイ人にとっては宗教が生活の一部なのだと実感した。また寺院の装飾は古い時代に作られたと考えるとその膨大な建設期間が窺えるほど、とても細かくきらびやかで美しかった。夜はカオサン通りに行き、最終夜をタイの学生たちと楽しんだ。声を通らないほど大きな音量で音楽が流れていたが、とても楽しかった。言語がなくても心を通じ合わせることを学んだ。



・ 8/23

マヒドン大学の授業に参加した。タイ語で書かれた医学書が少ないため、授業は基本的に英語でなされていた。タイの学生たちが全員流暢な英語だったのにも納得がいった。受け入れてくれたマヒドン大学の学生のおかげでムエタイをした。ムエはボクシング、戦いを意味しており、昔からあるタイボクシングのことである。[日本](#)のメディアなどではよくムエタイのキックが罰ゲームなどで使われているので知ってはいた。基本のステップ、パンチやキックなどを教えてもらった。全力で人に当たる体験はとても新鮮でとてもすっきりとした気分になった。夜にはタイの学生たちに見送ってもらってスワンナプーム空港を出発した。



・ 成果、今後の抱負

今プログラムを通して、私が最も貴重な体験だったと感じたのは、タイの学生たちと共に過ごすことで得られたことでした。まずは医療に対して、受ける立場でもあり、これから従事していく立場でもあるタイの学生たちと病院を見学し、話し合ったりすることで、より実生活に基づいた知識を学ぶことができました。また、彼らの優しい人柄や、何よりも医療や医学に対する意識の高さ、見習わなければならないと感じることが本当にたくさんありました。今回の経験をこれからの私の未来に活かし、社会に役立つ人材となれるよう精一杯努力する所存です。本当にありがとうございました。

・謝辞

今回の大阪大学・マヒドン大学の交換留学を滞りなく行えたことに対し、ご協力くださった、受入時のホストファミリーの皆様、快く見学を受け入れてくださった大阪大学医学部附属病院の先生方、マヒドン大学・病院の先生方、タイの学生たち、そして毎年当プログラムを岸本国際奨学金に採択してくださる岸本忠三先生並びに関係者の皆様、心からの感謝を申し上げます。

